

3.2 1次独立と基底

この節では1次独立と基底について学ぶが、1次独立を定義する前に前節で考えたベクトルの組による生成の例を見る。

例 3.5 $x_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}$, $x_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $x_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{pmatrix}$ とする。このときこれらのベクトルの組によって生成されるベクトル空間

$$W = \langle x_1, x_2, x_3 \rangle$$

を考える。 W は3個のベクトルの組から生成されているが、実は2個でも生成される。即ち次が成立する；

$$W = \langle x_1, x_2 \rangle$$

これを示すためには $W' = \langle x_1, x_2 \rangle$ とおくと、 $W = W'$ を示せばよい。定義から $W' \subseteq W$ が成立する。逆を示す。最初に $x_3 = 2x_1 - x_2$ が成立することを注意しておく。 x を W の任意のベクトルとする。このとき実数 $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$ が存在して

$$x = \alpha_1 x_1 + \alpha_2 x_2 + \alpha_3 x_3$$

が成立している。

$$\begin{aligned} x &= \alpha_1 x_1 + \alpha_2 x_2 + \alpha_3 x_3 \\ &= \alpha_1 x_1 + \alpha_2 x_2 + \alpha_3 (2x_1 - x_2) \\ &= (\alpha_1 + 2\alpha_3)x_1 + (\alpha_2 - \alpha_3)x_2 \end{aligned}$$

となるので、 $x \in W'$ が分かり、 $W \subseteq W'$ の成立が示される。

次の例を考える。 $y_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}$, $y_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $y_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ とし、

$$W_1 = \langle y_1, y_2, y_3 \rangle$$

とおく。先ほどの例と異なり $W'_1 = \langle y_1, y_2 \rangle$ とおくと $W'_1 \subsetneq W_1$ となる。このことは $y_3 \notin W'_1$ ということから分かる (演習問題 3.7 参照)。

演習問題 3.7 例 3.5 の y_3, W'_1 について $y_3 \notin W'_1$ を示せ。

この様に生成に関してベクトルの組により性質が異なる。そこで次を定義する。

このプリントも含め講義関連のプリントは <http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~kouno/kougi.html> においてある。

定義 3.6 ベクトル空間 V のベクトルの組 v_1, \dots, v_k が次の性質をもつとき 1 次独立 (*linearly independent*) であるという: 「スカラー c_1, \dots, c_k に対し

$$c_1 v_1 + \dots + c_k v_k = \mathbf{0}$$

が成立していれば $c_1 = \dots = c_k = 0$ 」

係数がすべて 0 のときはいつでも 1 次結合のベクトルが 0 になる。この定義はその逆が成立する場合に名前をつけたものである。

例 3.5 でいうと x_1, x_2, x_3 は 1 次独立ではないが, y_1, y_2, y_3 は 1 次独立である。

演習問題 3.8 例 3.5 の x_1, x_2, x_3 が 1 次独立ではないことを示せ。また y_1, y_2, y_3 が 1 次独立であることを示せ。

演習問題 3.9 次のベクトルの組が 1 次独立かどうか調べよ。

$$(1) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

$$(2) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(3) v_1 = \begin{pmatrix} a \\ a \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(4) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

$$(5) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

$$(6) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ p \\ 3 \end{pmatrix} \quad \text{ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

$$(7) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ p \end{pmatrix} \quad \text{ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

演習問題 3.10 x_1, x_2, x_3 は 1 次独立とする。 y_1, y_2, y_3 が 1 次独立かどうか調べよ。

$$(1) y_1 = x_1, y_2 = x_1 + x_2, y_3 = x_1 + x_2 + x_3$$

$$(2) y_1 = x_1 + x_2, y_2 = x_2 + x_3, y_3 = x_3 + x_1$$

$$(3) y_1 = x_1 - x_2, y_2 = x_2 - x_1, y_3 = x_1 + x_3$$

$k = 1, 2, 3$ の場合 1 次独立が何を意味しているか具体的にみよう。ここでは $V = \mathbb{R}^3$ とし、幾何的イメージも考える事にする。

最初は $k = 1$ の場合： v_1 に対し $c_1 v_1 = 0$ から $c_1 = 0$ が出てくるための必要十分条件は $v_1 \neq 0$ である。即ち 1 個のベクトル v_1 が 1 次独立である必要十分条件は $v_1 \neq 0$ である。生成の記号を用いて書くと v_1 が 1 次独立である必要十分条件は $\langle v_1 \rangle \neq \{0\}$ である。

次に $k = 2$ の場合： v_1, v_2 が 1 次独立である場合、 $v_i \neq 0$ ($i = 1, 2$) はすぐに分かる。また 2 つのベクトルが平行だと $v_1 = \alpha v_2$ と書けるので 1 次独立ではない。逆に 2 つのベクトルが平行でないとき $c_1 v_1 + c_2 v_2 = 0$ が成立していると $c_1 = c_2 = 0$ となるの。よって 1 次独立である必要十分条件は 2 つのベクトルが並行でない事である。

生成の記号を用いて書くと v_1, v_2 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle$ が成立する事である。

$k = 3$ の場合： v_1, v_2, v_3 が 1 次独立である必要十分条件は 3 つのベクトルが平行 6 面体の 3 辺になっている事である。1 次独立を否定すると、 $c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3 = 0$ かつ $c_1 \neq 0$ または $c_2 \neq 0, c_3 \neq 0$ が成立する。 $c_3 \neq 0$ とすると、 $v_3 = -\frac{c_1}{c_3} v_1 - \frac{c_2}{c_3} v_2$ と表す事ができる。このとき v_3 は v_1 と v_2 が張る平面上に存在する。 $c_1 \neq 0, c_2 \neq 0$ の場合も同様にできる。生成の記号を用いて書くと v_1, v_2, v_3 が 1 次独立である必要十分条件は $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2, v_3 \rangle$ が成立する事である。

今の議論を一般的に述べると次の命題が得られる。

命題 3.7 ベクトルの組 v_1, \dots, v_n が 1 次独立で必要十分条件は「任意の $i = 1, \dots, n$ に対し、

$$\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \dots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1}, v_i \rangle \subsetneq \dots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_n \rangle$$

が成立することである。

どのようなベクトルの組に対しても

$$\{0\} \subseteq \langle v_1 \rangle \subseteq \dots \subseteq \langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle \subseteq \langle v_1, \dots, v_{i-1}, v_i \rangle \subseteq \dots \subseteq \langle v_1, \dots, v_n \rangle$$

は成立する。命題は 1 次独立のとき等号が成立しないことを主張している。

証明 v_1, \dots, v_n は 1 次独立であると仮定する。背理法で示す。ある i に関し $\langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle = \langle v_1, \dots, v_i \rangle$ が成立したと仮定する。このとき $v_i \in \langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle$ が成立している。このとき実数 $\alpha_1, \dots, \alpha_{i-1}$ が存在して

$$v_i = \alpha_1 v_1 + \dots + \alpha_{i-1} v_{i-1}$$

と書くことができる。このとき

$$\alpha_1 v_1 + \dots + \alpha_{i-1} v_{i-1} + (-1)v_i + 0v_{i+1} + \dots + 0v_n = 0$$

が成立する。1 次独立より $-1 = 0$ となり矛盾。

逆に

$$\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \dots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1}, v_i \rangle \subsetneq \dots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_n \rangle$$

が成立しているとする。1次独立の定義より

$$\alpha_1 \mathbf{v}_1 + \cdots + \alpha_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

をみたく実数 $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ は $(\alpha_1, \dots, \alpha_n) = (0, \dots, 0)$ のみであることを示す。

今 $\alpha_n \neq 0$ を仮定すると

$$\mathbf{v}_n = \left(-\frac{\alpha_1}{\alpha_n}\right) \mathbf{v}_1 + \cdots + \left(-\frac{\alpha_{n-1}}{\alpha_n}\right) \mathbf{v}_{n-1}$$

と書けるので $\mathbf{v}_n \in \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{n-1} \rangle$ となり $\langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{n-1} \rangle = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$ となり矛盾。よって $\alpha_n = 0$ が成立する。このとき

$$\alpha_1 \mathbf{v}_1 + \cdots + \alpha_{n-1} \mathbf{v}_{n-1} = \mathbf{0}$$

が成立している。

$\alpha_{n-1} \neq 0$ を仮定すると

$$\mathbf{v}_{n-1} = \left(-\frac{\alpha_1}{\alpha_{n-1}}\right) \mathbf{v}_1 + \cdots + \left(-\frac{\alpha_{n-2}}{\alpha_{n-1}}\right) \mathbf{v}_{n-2}$$

と書けるので $\mathbf{v}_{n-1} \in \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{n-2} \rangle$ となり $\langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{n-2} \rangle = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{n-1} \rangle$ となり矛盾。よって $\alpha_{n-1} = 0$ が成立する。このとき

$$\alpha_1 \mathbf{v}_1 + \cdots + \alpha_{n-2} \mathbf{v}_{n-2} = \mathbf{0}$$

が成立している。

以下順に議論していけばすべての i について $\alpha_i = 0$ が示される。 ■

e_1, e_2, e_3 を基本ベクトルとする。即ち

$$e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, e_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とする。任意の \mathbb{R}^3 のベクトル \mathbf{v} に対し、スカラー x_1, x_2, x_3 が唯1組存在して $\mathbf{v} = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3$ と表す事ができる。このような性質を持つベクトルの組は基本ベクトルに限らない (演習問題 3.11 参照)。ここでは部分空間に関してその様なベクトルの組を考える。

定義 3.8 ベクトル空間 V に対し次の性質をもつベクトルの組 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が存在する時これをこのベクトル空間 V の基底 (base) と呼ぶ。

- (1) $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ は1次独立である。
- (2) ベクトル $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ は V を生成する。即ち $V = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$ が成立する。

演習問題 3.11 次のベクトルの組がベクトル空間 V の基底である事を示せ。

(1) $V = \mathbb{R}^3$ で、ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$

(2) $V = \mathbb{R}^3$ で、ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 4 \end{pmatrix}$

(3) $V = \mathbb{R}^3$ で、ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$

(4) $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$ で、ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$

(5) $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x - 2y + z = 0 \right\}$ で、ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$

(6) $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$ でベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$

(7) $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^4 \mid x - y + z + w = 0 \right\}$ でベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$

(8) $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x + y + z = 0, x - 2y + z = 0 \right\}$ で (1 個のベクトルからなる) ベクトルの組は $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}$

(9) $V = \mathbb{R}^n$ で、ベクトルの組は基本ベクトル e_1, \dots, e_n

上で考えたのは与えられたベクトルの組が基底であるかをチェックすることであった。次にベクトル空間が与えられたとき基底を見つけることを考える。例を 2 つ考える。

例 3.9 ベクトル空間 V が $V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^4 \mid x_1 + x_2 + x_3 + x_4 = 0, x_1 + 2x_2 + x_3 - x_4 = 0 \right\}$

の様な形で与えられているときは、連立 1 次方程式の解をパラメータ表示することにより、基

底「候補」を求めることができる。この例を考える。 V の元 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix}$ は連立 1 次方程式の

解となっている。係数拡大行列は $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 1 & -1 & 0 \end{pmatrix}$ なので基本変形を実行して $B =$

$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 3 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 0 \end{pmatrix}$ を得る。よってこの解は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -x_3 - 3x_4 \\ 2x_4 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = x_3 \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_4 \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と書ける。ここで $v_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $v_2 = \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ とおく。この v_1, v_2 を基底候補に選ぶ。あとは

実際に基底になっていることを示せばよい。

例 3.10 次にベクトル空間 V が $V = \{v_1, v_2, v_3\}$ の様な形で与えられている場合を考える。ここで

$v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$, $v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $v_3 = \begin{pmatrix} 3 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$ とする。 v_1, v_2, v_3 は V を生成しているので, v_1, v_2, v_3

が 1 次独立なら V の基底になる。しかし今の場合 $v_3 = 2v_1 + v_2$ が成立しているので, 1 次独立ではない。この関係式から $v_3 \in \langle v_1, v_2 \rangle$ が分かり, $V = \langle v_1, v_2 \rangle$ となる。 v_1, v_2 が 1 次独立なら V の基底になる。今 v_1, v_2 は 1 次独立なので v_1, v_2 が基底になる。

演習問題 3.12 次の部分空間の基底を 1 組求めよ。

$$(1) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x_1 + 5x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(2) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^4 \mid x_1 + 2x_2 + 3x_3 + x_4 = 0 \right\}$$

$$(3) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(4) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^4 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 + x_4 = 0, 2x_1 + 8x_2 - 2x_3 + x_4 = 0 \right\}$$

$$(5) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(6) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + 2x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(7) V = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ -3 \end{pmatrix} \right\rangle$$

$$(8) V = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \\ 2 \end{pmatrix} \right\rangle$$

$$(9) V = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \end{pmatrix} \right\rangle$$